

1-2 ストリングスの音域と 各楽器の特徴

ストリングスを構成する楽器の音域と特徴

ストリングスは、ヴァイオリン(Violin)、ヴィオラ(Viola)、チェロ(Cello)、コントラバス(Contrabass)の集合体であるため、ストリングスの音域はそのまま、これらの楽器の音域に依存することになる。

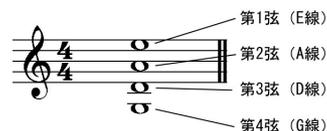
各楽器の音域や特徴を正しく理解することが、ストリングスアレンジ&打ち込み技術向上の最初のポイント。

丸暗記するつもりで、しっかり学んでいこう！

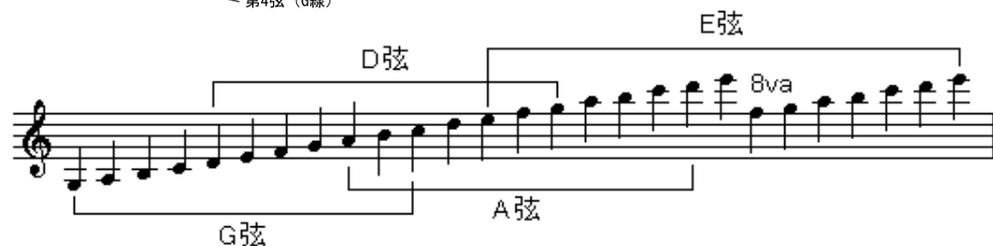
楽器の解説 - Violin -



調弦と音域



低い方から順に G. D. A. E と調弦。
音域はストリングスの中で最も広く、G2～E6まで。



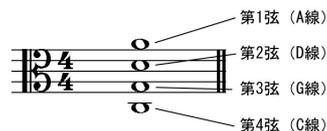
特徴

ストリングス群の中で最も高音を担当する楽器。
音域も最も広く、そのサイズ故に運指も比較的楽に行えることから、
様々なパッセージをバランス良く弾きこなせる。
まさにストリングスを代表する楽器。

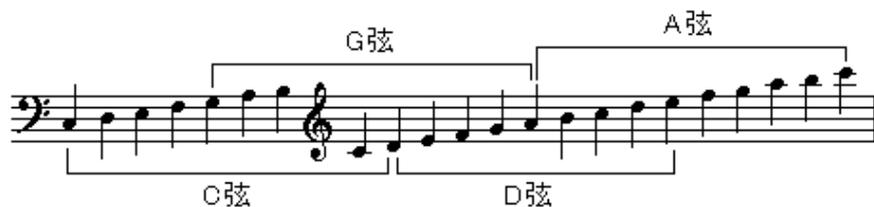
楽器の解説 - Viola -



調弦と音域



低い方から順に C. G. D. A と調弦。
音域はViolinに比べて狭く、C2～C5程度まで。



特徴

ストリングスセクションの中域を担当する楽器。

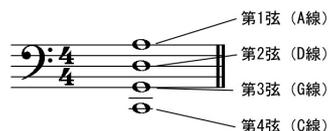
調弦はViolinの完全5度下であるが、その音域を演奏する為の十分な大きさが無いため、独特の暖かみと少しくすんだ音色が特徴。

低音から中音域は豊かな音を奏でるが、高音域は甲高く、運指も困難なことから、C5程度までの使用が無難である。

楽器の解説 – Cello (Violoncello) –



調弦と音域



低い方から順に C. G. D. A と調弦。(Va.のOct下)
音域はViolinの次に広、C1～G4まで。



特徴

低音域から中音域まで幅広くカバーする万能選手。

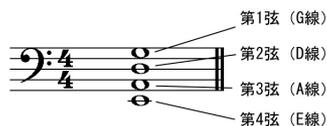
楽器の大きさも十分に備えているため、豊かな低音を得られる上に、高音域のやや憂いのある音色も非常に魅力的である。

また、その独特の音色と音域の広さ故に、ソロを取ることも少なくなく、Violinの次にメジャーな楽器といえる。

楽器の解説 – Contrabass (Double Bass) –



調弦と音域



低い方から順に E. A. D. G と調弦。(E.Bassと同じ)
低音補強用の楽器の為、音域はE0～C3までと狭い。

実音はオクターブ低い



特徴

原則としてストリングスセクションの低音部を補強するために用いられる楽器。専らCelloのオクターブ下を演奏することが多い。使用することで非常に重厚感のあるサウンドを得られるが、エレキベース等同等の役割を担う楽器が存在するポップス等のアレンジでは、必ずしも必要ではない。

音域を守ることの重要性

弦楽器に限らず、楽器にはそれぞれ得意な音域や、音域による音色の違いがある。これらを理解しないままアレンジ&打ち込みをしてしまうと、

- 演奏ができない(または演奏が困難)
- よく鳴らない(響かない)
- 打ち込みがまったくリアルに聞こえない

などの不都合が起きるため十分に注意しよう！

生演奏を収録する場合はもちろん、打ち込みだけでアレンジする場合にも、音域を守ることでリアルさが格段に増すので、必ず音域に注意を払ってアレンジするよう心がけよう。